

## 廣松渉の表情論再考

檜垣立哉（専修大学／大阪大学）

戦後日本の代表的な哲学者廣松渉は、マルクス主義的な物象化の議論を軸に研究を進め、主著『存在と意味』の二巻を著したことで名が知られているが、自身の活動の最盛期であった一九八〇年代に、『メルロ＝ポンティ』（共著、岩波書店）、や『表情』（弘文堂）、あるいは『共同主観性の現象学』（共著、世界書院）を心理学者の増山真緒子とともに出版している。さらに『存在と意味』における廣松独自に四肢的存在構造にかんして能記と所記という、ソシュールの記号論であるシニフィアン・シニフィエから借用したとおぼしき言葉をもちいてみている。九〇年代にはソシュール研究者丸山圭三郎との対談もあり、そこには、当時の現代思想であった記号論の積極的なとりいれをみてとることもできる。

共同主観的世界の存在構造を明確化し、近代的パラダイムをマルクスの物象化論の検討を軸に乗り越えるという明確な方向性をもって進められた廣松の仕事であるが、八〇年代の主著完成期には、自らの共同主観というあり方のある種の精緻化のために、メルロ＝ポンティの現象学や当時すでに喧伝され始めたギブソンのアフォーダンスを含む実験心理学の「表情論」との「対決」ないしは「再検討」が必要になったとおもわれる。他方、能知・所知という言葉とともに能記・所記をもちいる廣松が、この時期に「表情論」を、主観—客観図式の乗り越えに加えて別途考えていた事実は、表情的な情動の場を記号生成の前提とみていた点からも、重要であるとおもわれる。

廣松流のマルクス主義を展開した仕事は、その遺産が明確に引き継がれることなく時代の諸潮流のなかに埋もれてしまった感もある。しかしながら「現代思想」と「記号論」の活性期に、独自の仕方で「表情」の共同性について思考したことは、現在の観点からみても、心理学や現象学的表情論との関連など、示唆に富むものではないだろうか。発表では廣松の表情論の、廣松的共同存在論的な、あるいは記号論的な背景を探りながら、その可能性を再考してみたい。

### 参考文献

廣松渉、『表情』、弘文堂

廣松渉・増山真緒子、『共同主観性の現象学』、世界書院

廣松渉・港道隆、『メルロ＝ポンティ』、岩波書店